

1

田村亮子の出現

— 新たな時代の幕開け —

昭和53年（1978）に第1回全日本女子柔道選手権大会が開催されてから10年の時を経て、女子柔道は新たな時代へ向けて歩み始めた。世界では、昭和63年（1988）にソウル五輪で女子柔道が公開競技として採用され、4年後のバルセロナ五輪では正式種目として行われることが決定した。日本では、競技の幕開けから日本の女子柔道を牽引してきた筆者が引退。それから1年後に、後を引き継ぐかのように、田村亮子が彗星のごとく現れた。

この時期に田村という逸材が現れたことが偶然であったのか、それとも必然であったのか、誰にもわからない。しかし、彼女の出現が日本女子柔道のその後に大きな影響を与えたことは間違いない。

◆山口香の引退

まずは筆者の記憶をたどり、一つの時代の終焉を振り返ってみたい。ソウル五輪の翌年に開かれた第12回全日本女子柔道体重別選手権大会（平成元年・1989）に、筆者は階級を52kg級から48kg級に落として出場した。新たな階級でも順調に勝ち上がり、決勝でソウル五輪同階級銀メダリスト・江崎史子と対戦。試合はやや筆者の優勢で進んでいった。しかし、終了間際、江崎得意の寝技に持ち込まれて敗れた。

大会後、筆者は引退を表明した。当時、25歳。年齢を考えれば早い引退であったかもしれない。しかし、当時は現在のように練習環境が整っておらず、大学卒業後、女子選手を受け入れてくれる実業団はほとんどなかった。いや、たとえ受け入れ先があったとしても、引退していいたかもしれない。

13歳で全日本女子柔道選手権で優勝して以来、筆者には女子柔道を背負って戦ってきたという自負があった。柔道は日本のお家芸といっても、女子は世界では全く歯が立たず、社会的な認知度も低かった。そうした時代に認められるには勝つしかなかった。筆者には「勝って柔道

界や社会に女子柔道を認めてもらいたい」という思いが、勝負に対する気持ちと同じほど強かった。恵まれない環境が逆にバネにもなった。

そして、3度目の挑戦でついに世界の頂点に立ち（昭和59年・1984、ウィーン）、同じく福岡国際大会でも3度目の挑戦で勝つことができた（昭和60年・1985）。その時点で、自分が果たすべき先導者としての役割は、ひとまず終わったのだという思いがあったのだろう。その頃を振り返ってみると、頑張ろうという気持ちはあるのになぜか盛り上がってこない心と格闘していたように思う。

最後の大会に階級を変えて挑んだのも、何か環境を変えれば気持ちも変わるのではないかという思いからだ。引退を決めた直接の理由は、負けた悔しさより、「これで辞められるや」と解放される」といった安堵あんどの気持ちが強かったからであった。自分の歩んできた道に悔いはなく、次世代の選手たちが後を引き継いでくれることに、何の不安も未練もなかった。自分でできることは、選手として頑張ることではなく、次に歩みを進めることだとも考えた。

筆者の引退によって、女子柔道競技の第1ステージに幕が下ろされた。次は誰が女子柔道を引っ張っていくのか。この時点では誰も知る者はいなかった。

◆ニューヒロイン田村亮子、衝撃の誕生

そのときは突然やってきた。第8回福岡国際女子柔道選手権大会（平成2年・1990）48kg級準決勝戦に、その年の全日本体重別選手権で3位となった田村亮子（当時15歳）が登場する。対するは、当時無敵を誇っていた女王ブリックス（イギリス）。これまで何人もの日本選手が挑んできたが、ことごとく跳ね返されてきた高い壁である。

何かが起こる予感がなかったわけではない。しかし、これほどまでの衝撃を予測できた人はいなかっただろう。それはわずか28秒間の出来事だった。田村が立て続けにブリックスから「技有」を奪い、合わせ技で一本勝ちを収めたのだ。

ブリックスがこれほどまでに何もできないで終わった試合を、筆者も見たことがなかった。試合後、呆然と立ち尽くしていたブリックスの姿を、今でもはつきりと覚えている。ブリックス本人ですら、何が起こったのかわからないという気持ちだったと思う。会場にいた人々も同様だった。何が起きたのかわからず、戸惑った空気が流れた。が、そこから一転、大歓声が沸き起こった。

そして、その強さは決勝戦でも証明された。田村は、一回りも体の大きい李（中国）に臆することなく挑んでいき、1分50秒、背負投で「技有」を奪うと、焦って出てきた李の内股を透かして「一本」。圧勝といつていいほどの勝ちっぷりであった。花が開くときというのはこういうものなのだろう。それまでただの一選手にすぎなかった田村が、一気に花開いたので。

福岡国際の前年、田村は全日本女子体重別選手権九州予選に出場しているが、準決勝で衛藤裕美子（福岡大）に敗れ、本大会への出場は叶かなわなかった。その翌年、同予選で優勝して念願の全国大会に駒を進めるも、前述したように優勝とはいかなかった。当時、彼女の試合を見て、潜在的な能力は多くの人が認めてはいたものの、体の小ささ、経験のなさなどから、世界に届くにはまだまだ時間が必要であると考えられていた。しかしながら、それからわずか数カ月後の福岡国際で、そういったハードルを一気に飛び越え、見事に頂点に立ったのである。

当時、筆者はテレビ放送の解説をしていたが、田村の試合を見て鳥肌が立ったのを覚えている。「並の選手ではない」と思った。その理由は試合運びにあった。一般に、自分よりも格上の相手と戦ったときに「技有」で先行したら、どんな選手でも気持ちは守りに入るものだ。その結果、結局守りきれずに敗れるケースが多い。理屈ではわかっている、勝ちを意識して体

が固まってしまい、守りに入ってしまうからである。

しかし、田村は違った。女王ブリックスから「技有」を奪った後も躊躇ちゆうちよすることなく攻め続け、試合を決めた。そこには勝負に対する貪欲どんよくな態度、どんな相手であろうと臆せずに向かっていく気持ちの強さがあった。この気持ちの強さ、自分の技術に対する自信こそ、それまでの日本女子選手に足りなかったものであった。柔道で勝って勝負で負けていた原因はそこにあったのである。

わずか15歳の田村が、欧州勢の強さの象徴でもあった女王ブリックスを一方的に攻め破ったこのときこそ、日本女子柔道の新たな時代への第一歩であった。

◆福岡が生んだスターYAWARAちゃん

身長144cm、体重44kg。小さな体と、前髪をゴムで縛ったヘア・スタイルの田村は、当時人気のあった柔道漫画『YAWARA』の主人公と重なったことから、この大会後、「YAWARAちゃん」と呼ばれるようになった。畳が上がったときに見える圧倒的な強さと表情の幼さのギャップがさらなる人気を呼び、一躍国民的なスターへと駆け上がった。